

氏名	田舎片 麻未		
ヨミガナ	イナカガタ アサミ		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博音第364号		
学位授与年月日	令和4年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉 ハンス・ライグラフのピアノ指導にみる表現の深化過程 —打鍵技術をめぐる指導の展開および音楽観の継承を視点として—		
論文等審査委員			
（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 山下 薫子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 佐野 靖
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 伊藤 恵

（論文内容の要旨）

本研究は、スウェーデンを代表するピアニストであるハンス・ライグラフ（Hans Leygraf, 1920-2011）が、いかにして弟子の演奏を説得力あるものへと導いたのかを明らかにすることを目的とし、彼の打鍵技術をめぐる指導の実際と弟子による研鑽の過程、および彼の師の指導を検討したものである。

本研究では、主に①ライグラフに関する雑誌記事、②ライグラフの指導に関する録音・録画資料、③筆者によるライグラフの弟子へのインタビュー、④ライグラフの二人の師が出版した教本を検討の対象とし、調査および分析を進めた。

第1章では、ライグラフのピアノ指導に迫るための前提として、彼がどのような演奏を目指し、どのように音楽と対峙していたのか、その音楽観を、主にライグラフおよび弟子の言説に基づき検討した。彼は、演奏者の精神が音楽に反映されることを理想とし、その精神を美しい音に託して演奏していた。また、作品を丹念に分析し再構成することによって、作品および演奏者の「感情」を交わらせること、そしてそれを確かな技術によって再現することを信条としていた。

第2章では、ライグラフが打鍵技術をめぐりどのような指導を展開していたのか、彼の“Übung”における指導内容および指導場面を検討した。その指導では、さまざまな種類の打鍵技術をめぐる身体および聴取の意識的な「経験」に基づき、段階を追って音楽の細部および全体を捉えること、また表現の意思を明確にすることが目指されていた。ライグラフは、基礎的な「経験」を共有した上で、それを応用することによって協働的な表現の探究を実現させていた。

第3章では、弟子が“Übung”に始まるライグラフの指導から何を心得、どのように理解を深め、音楽を表現するに至っているのか、主に彼らの言説に基づき検討した。弟子は、ライグラフとともに表現を探究する経験を経て、打鍵技術によって音色をつくることを習得するのみならず、いかに考え音楽と向き合うかということを探求するようになった。その過程には、徹底的に考えることによる意識との葛藤も生じたが、それは、意識を無意識の領域へと押し上げ、打鍵技術および演奏表現の深化を導くものでもあった。弟子は、ライグラフの指導から得た「経験」を糧に、音楽と向き合い、表現を探究し続けていた。

第4章では、ライグラフ自身がどのような経験を経て、“Übung”をはじめとする彼の指導を導き出すに至ったのか、主に彼の言説および二人の師の教本に基づき検討した。ライグラフは、内的な響きのイメージを重視するゴットフリート・ボーン（Gottfried Boon, 1886-1981）のもとで研鑽を積んだ後、アンナ・ヒルツェル＝ランゲンハーン（Anna Hirzel-Langenhahn, 1874-1951）と出会い、指の動きに対する意識をもつようになった。二人の師の指導には、対照的な打鍵技術の存在が浮かび上がり、ライグラフはその両方を“Übung”に取り入れていた。両者の打鍵技術には、高度な集中力が求められるということ、また響きに生彩を与えるという目的に、共通性も認められた。彼らの指導は、ライグラフの音楽観および指導の実際、さらには弟子による研鑽の過程を通して見出された演奏表現の深化につながる原点であるといえ

るものであった。

本論は、ライグラフのピアノ指導が、打鍵技術をめぐって展開されるものでありながら、表現の探究に際して異なる要素の融合を経験させること、そこに生じるある種の矛盾やそれに対する葛藤と向き合わせることを通して、彼自身が人生をかけて実践し続けた音楽家としての「哲学」を伝え、弟子の演奏表現の深化を導くものであったと結論づけるものである。その具体的な過程は、以下の三点に集約することができる。

第一に、ライグラフは、身体および音楽におけるさまざまな要素の融合に基づく体系的な指導により、打鍵技術を起点として音楽と心の融合を図り、個々人の表現を探究する道筋を共有した。

第二に、ライグラフは、問答を繰り返す指導により、基礎への回帰を定着させるとともに、一見相反する意識化および無意識化を促し、打鍵技術および演奏表現の深化を導いた。

第三に、第一および第二に示した指導の展開は、二人の師の対照的な指導を融合することに始まるライグラフの研鑽の軌跡といえるものであった。彼は、その音楽人生における経験を追体験するような指導を通して、自律した音楽家として表現を探究し続ける術、すなわち音楽家としての「哲学」を弟子に伝えた。

本研究を通して、技術と表現を往還させるライグラフの指導の展開とともに、演奏家が歩む長く厳しい研鑽の道筋を明らかにすることができたと考える。本研究で捉えることができたのは、一人の演奏家兼指導者とその師弟の間に限定される営みであるものの、そこに浮かび上がる演奏表現の深化が導かれるに至る道筋は、独自の表現を求めて日々音楽と向き合う演奏家やその指導者に示唆を与えるものであるといえよう。また本研究の成果は、ライグラフとその師弟の間における音楽観の継承が奏法の変容とともに成立していたことを示している点に、更なる興味をかきたてられるものである。ライグラフと彼に繋がる演奏家および指導者の音楽的な営みを、ピアノ奏法の歴史的変遷の一端として捉えることを通して、音楽を表現するとはいかなることかと改めて問い直すことも可能であろう。

#### (総合審査結果の要旨)

本研究は、H.ライグラフ (Hans Leygraf, 1920-2011) の音楽観とピアノ指導の理念および具体的な指導方法を明らかにしたものである。ライグラフは、スウェーデンを代表するピアニストであり、同時に教育者としても名高く、弟子たちは世界各地において演奏と教育の両面で活躍している。ライグラフは、“Übung” という独自のメソッドを確立した。弟子たちが自らの演奏を追究する上で、この“Übung” が重要な役割を果たしていると考えた申請者は、彼の指導とラジオ番組を収録したDVDおよび日本の音楽大学で開催された公開講座の内容を分析するとともに、弟子である西欧と北欧、南米、そして日本のピアニスト、計11名へインタビューを行った。加えて、ライグラフの師の教本を検討し、彼の指導法が形成される道筋を探った。

本論は、4つの章からなる。まず第1章では、演奏について彼が、作品と演奏者の感情を交わらせることにより、音色と打鍵技術に支えられて作曲者のイデーが演奏者の作品として再構成されると考えていたことを説明した。第2章では、“Übung” の指導において、打鍵技術をめぐる問答を繰り返すことによって生徒の意思を引き出すとともに、演奏の追究の中でいつでも立ち戻って考えることのできる礎を築こうとしていたことを明らかにした。第3章では、弟子たちが“Übung” を経て美しい音色をつくる技術を得ただけでなく、無意識の意識化、さらには意識からの脱却によって音楽に感情が浮かび上がると考えるに至っていることを述べた。そして第4章では、二人の師、G. ボーン (Gottfrid Boon, 1886-1981) とA. ヒルツェル＝ランゲンハーン (Anna Hirzel-Langenhahn, 1874-1951) による対照的な打鍵技術が、ライグラフの音楽観や指導法の形成に与えた影響を示した。

結論として、申請者はライグラフの音楽教育者としての功績を次の3点に集約して指摘している。①打鍵技術と音色の聴取を起点とする体系的な指導により、演奏を探究するための道筋を弟子と共有したこと。②問答によって基礎への回帰および意識化と無意識化を促し、深い演奏表現へと導いたこと。③師の指導を原点とする自らの音楽人生を弟子に追体験させて、音楽家としての生き方を伝えたこと。

本研究からは、インタビューであるピアニストの深い精神性に寄り添い、「音楽は哲学ですから」というライグラフの言葉の神髄に迫ろうとする申請者の一貫した姿勢が読み取れる。学位審査会では、スウェーデン語の読解にも取り組みながら、ライグラフの子弟関係の中に閉じられていた音楽の世界を詳細に描き出した点が高く評価された。ただし、音楽家の内面世界を言語化することの困難に直面して、一部に多様な解釈を生みかねない表現が見られることは、今後改善すべき課題と考えられる。

以上を総合的に判断し、申請者が課程博士の研究として優れた成果をあげたと認めて、全会一致で合格と判断した。